

郷土の名勝佛ヶ浦観察記

和田千蔵

## 序

我が郷土下北半島の西岸大間崎から南方牛首崎（脇野澤村新井田附近）に至る間は第三紀又は火山岩の險崖と一部に秩父古生層が露出して岩石に基く勝景が澤山ある。就中福浦崎と牛瀧崎との間にある侵蝕海岸の岩盤上には、永年月の間丹念に彫刻された神佛鬼神人乃至は畜生の様な形をしてゐる奇岩怪石が羅列し、その背後の翠緑と相まつて元天下無雙の沿岩勝區をなしてゐる。この奇勝に對し古來地人民は自ら信仰の驚異を抱かしめられて、佛ヶ宇陀（歌又は宇多とも書きウタとはアイヌ語の砂濱の義だと云はれてる）と崇呼し今日に至つたのである。此所は交通が不便な所である爲によく世現には知られなかつたが大正十一年文豪大町桂月翁が日本山文學の基礎を築く目的で遙々同地を探勝され、其自然彫刻の巧妙さを嘆賞して「神のわざ鬼の手造り佛浦、人の世ならぬ所なりけり」と詠じたが、この名歌は繪葉書に迄はいる様になつてから佛ヶ浦の名目で次第に世の中に知られる様になつたのである。私は昨年九月廿三日から三日間こゝに滞在して親しく調査する機會を得ましたので、この記事を認めて皆様にご参考に供します。

### (一) 佛ヶ浦の所在地及び現狀

この所は數理上北緯四十一度十七分乃至四十一度十九分

郷土の名勝佛ヶ浦觀祭記

東經百四十度四十九分、行政區上青森縣下北郡佐井村字牛瀧の北方海上約二軒半の上陸し得る地點で、佐井營林署管内佐井村大字長宇縫道石一番國有林の一部第百十六林班(=ホ)小班に屬する所である。

佛ヶ浦の地形は畧々弦月狀に灣入した帶狀の曲浦で、その延長海岸線約一軒半幅約二百米に達す、斷崖背後は高さ約百米乃至三百米の雜木林になつてゐる、段丘は約二十米乃至四十米の深線海岸に接してゐる、岩礁は自然の防波堤となり小舟の碇泊に適してゐる、波打際と斷崖との間は概して平潤で白砂を布詰めた座敷の様で、諸所に高さ約六米乃至九十米位に達する形狀様々な奇岩怪石が無數に簇立又は轉在し、見方によつては佛像又は佛具類に似てゐる爲夫々佛教上に因んだ名稱がつけられてゐる、即ち一ツ佛、十三佛、蓮華岩、天龍岩、如來岩、香爐岩、燭臺岩、蠟燭岩、佛壇岩、五百羅漢、親子岩、二見岩等これで、牛瀧附近の奇岩怪洞の景勝と共に造化の巧妙に異彩が放たれてゐる。

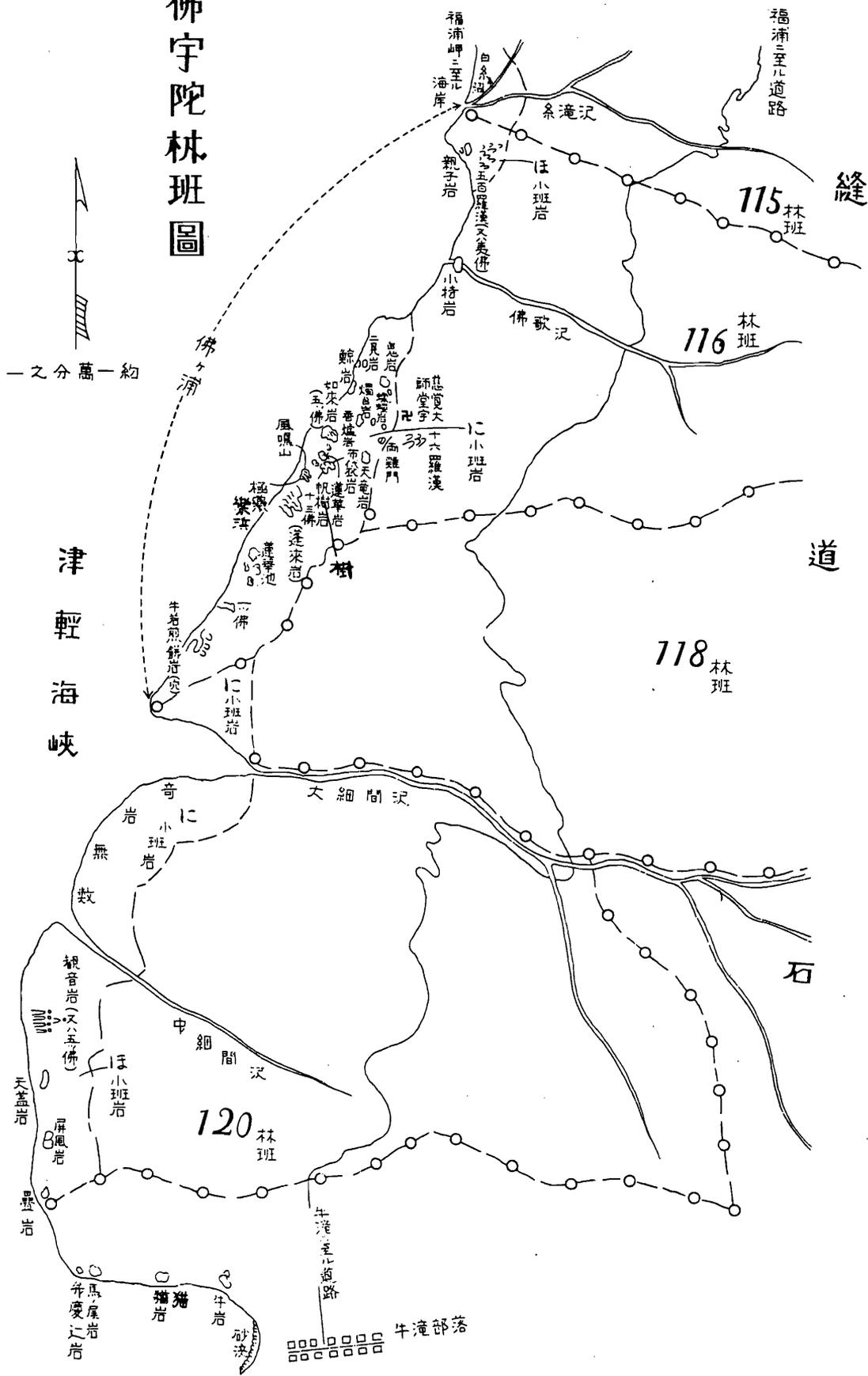
舟上からの眺は一目千岩羅列して如何にも明朗的の風景であるが、いざ上陸して地蔵の間から奥深く踏入ると、境内の四圍は悉く怪巨岩に繞うされ妖穴にはいつた様で波上の眺とは一風打變つた感じがする、彼方此方と漂ふてゐる間に絶間なく働く波浪の音色は薄暗い岩角に迄響き渡つて物凄く、突當る巨岩を仰眺すると將に吾をして壓せむばか

りの自然威を示し、加ふるに西方から吹來る潮風は強く冷かて痛く身にしみ込み、さながら地獄と極樂とを併せた様な物淋しさを感じるのである。

上陸する際に先づ着眼されるのは地藏の間を構成してゐる鯨岩で、岩の形は恰度鯨體の浮いた時に似てゐるといふのでこの名がある、岩體は約百米に延長し海を畧々圓形に包み自然に防波堤の様になつてゐる。こゝから上陸し岩礁を渡り海岸傳に北方に進んで二見岩と名つくる岩の間を通り、約二百米位行くと五百羅漢に達します、この怪岩は一名夷佛と稱し高さ約二十二米幅約七十三米の海崖で、岩の表面は異狀風化を受け一見多數の佛壇でも竝べた様に見える、表面は褐色で所々に風蝕を受けて削られた皿形の窪んだ部分があつて、下から見ると椎茸の菌傘の内面の様に白く見えてゐます、こゝの前面に當てゐる浅い海面には親子岩と稱する高くはない大小二つの奇岩が隆起してゐる、その大きな方を親岩と名つけ少し離れた小さい方を子岩と云ふてゐる、親岩は岩體の中央部から高低二塊に裂けてゐるが、何れも岩體の頂部は巧妙に彫刻され、低い方は一寸見ると騎上の古武士の装にも見え或は西洋婦人の装にも似てゐる、高い方の形は猛虎又は獅子の躡蹠してゐる状態によく似てゐます、子岩は特別に奇景を呈してゐないが兩岩體の對立で風致が増すのである。この五百羅漢附近を見てか

ら引返して地藏堂（慈覺大師堂宇）に向つて南進すると、少し小高い山岸の方に地藏堂が建てられてゐる、堂宇の背後は直ちに雜木林で細い林道がある（四軒で牛瀧部落に行ける）地藏堂の前面は廣濶たる岩盤から出來てゐるので、盤上には奇々怪々たる幾十の岩が點在してゐる、堂宇附近には佛壇岩、鬼岩その南方に蠟燭岩その少し離れた海面には燭臺岩、香爐岩等があつて、何れもその名の示された様な形をしてゐます、又山岸の小高い所には雙雞門と名つけ雌雄の雞が相對座してゐる様な奇岩がある、その左方林中の所々には十六羅漢と名つくる怪岩は屹立してゐます、尙南方には如來の頭岩と稱する怪岩と天龍岩、如來岩等の奇岩が聳立してゐる、この如來岩は五體の佛像を竝べた様な形をしてゐる爲に地方人に崇められるので有名である、この邊から更に南方に歩むと面白い岩ばかりあります、岩礁の内側には巨岩の破片は水蝕されて恰度蓮華の花又は蕾の様になつたものが三個ある、これを蓮華岩と名つけ大きなものでも高さも直徑も約四米位で表面の色は汚褐色に錆びてゐる、この東方には帆掛岩と稱する巨岩あつて、岩體の下部は庇狀に侵蝕されてゐるから數十人の雨宿りに使はれてゐる、こゝを見物に來る人は何時でもこゝで食事をすることになつてゐる、その一端は東方に延びて山麓に接してゐる所は破壊してゐるが洞穴になつて、その底部の砂を掘る

# 佛宇陀杖班圖



と小形の飽やその他の小型の介殻が澤山見附かります、こゝを貝塚だといふ人もあるが貝塚とは見られない、化石學上半化石といふ方がむしろ適當かと信じます、帆掛岩の背後には布袋岩と名づくる巨岩がある、その形は全く布袋が西に向つて立つた様に見えます。こゝから更に南に行くと灰白色に剝磨された巨岩が大山の様に聳立してゐる、即ち十三佛といふ岩で一名蓬萊山といひ、幾多の佛像を並べた様に見えてゐるが接近して親しく岩體を調べて見ると溝の様に侵蝕されて佛像を示し、海上より向つて右側の中央部から帶狀に裂目は約四十五度角を以て左方に走つて岩盤上に達してゐることが判る、その麓を西に廻れば裏面には鳳鳴山と稱する舊洞穴様の巨岩がある、この岩は佛ヶ浦中有名なもので洞穴の天井が陥落した結果門戸様の入口になり、兩岩壁は高さ約六十米位で屏風狀になつてゐる、その奥は約三百疊敷の大廣間になつて清淨無垢の白砂で敷詰められ、上の方から陽光を受け向つて左側の壁から清水が年中通して湧いてゐる、この水はPH七（中性）で飲料には適するが硬度が弱いため風味が悪い、地方人はこの泉を不老の瀧、白砂の空座敷を極樂濱と名づけ、この座敷の砂を他に持出す時には急に天候が變つて海が荒れ水難を受くるばかりではなく、その持出した本人もしくは家内に必ず病氣が起り、而も死ぬといふ恐ろしい迷信を言ひ傳へてゐます、

郷土の名勝佛ヶ浦觀察記

事は單純で科學上からは信じられない様ではあるが、よく調べてみると本當に持出した人がこの砂のために重病にかゝつたり死んだりしてゐるので不思議でたまりません。この話を知つてゐながら極樂濱の奥にはいと、何氣なしに踏まれる白砂は一步毎に吾をして警戒し、相手の話が山彦の様に響き上の方から思はない露滴が襟の内に落込み、波浪の働く音色はいとと物淋しく吾胸を突く様になつてくるから、この座敷を急いで辭退しこゝの門戸に進むと、明るい海面に眞帆、片帆が見え晴々した空氣を呼吸することが出来るのである。極樂濱の門戸を出てから更に數米を南方に進むと、波浪が丹念に彫刻した結果出來た小さい蓮華様の岩塊が亂踞してゐる蓮華濱に到達します、こゝは窪んでゐる爲に海水が何時でも溜つて居る關係上蓮華池といふのである。こゝから又岩礁傳に南進すること約十五米で佛ヶ浦の南端がつきるのであるが、その岩盤上には高さ約四十米位の一巨岩が兀立してゐる、これを一つ佛と名づけ胸高部の岩體周圍約百五十米で岩頂は著しく侵蝕されて尖銳となり一見ヨットの三角帆みた様になつてゐる、岩體の中央部から約四十五度の角度に深い裂目を劃し、上部本體の岩をのせかけた様に見えます、この上の方は風雨のために風化されて粗鋸齒狀になり、又上方から雨水が侵流するたために下方迄縦に溝が明かに出來てゐます、この岩の東方は

森林に接し西方は蒼海に岩基ををろし、その巍然として碧空を突いてゐる岩姿は實に雄大である。

こゝで佛ヶ浦の主要な奇岩怪石はつきたのであるが、この景勝に附隨して考慮しなければならぬことは岩礁の景觀である、こゝの岩礁は幾千萬年の間怒濤の打撃を受けて削磨された結果、その表面は恰度粗い鮫肌のように凹凸不定の粗面になり、地蔵の間の岩礁では諸所に一米から二米位の壺穴に穿たれて海水を湛へ、その中には小蟹や小さな雑魚が波浪に運ばれて泳いでゐる、又一つ佛の岩礁では鮫肌みた岩面にフヂツボ、キンヤゴ、マルゴ等の有殻小動物が寄着して一風雅致を呈してゐますが、跣足で歩ると痛くて數歩を進むると痛感の悲聲を發せざるを得ないことになります。

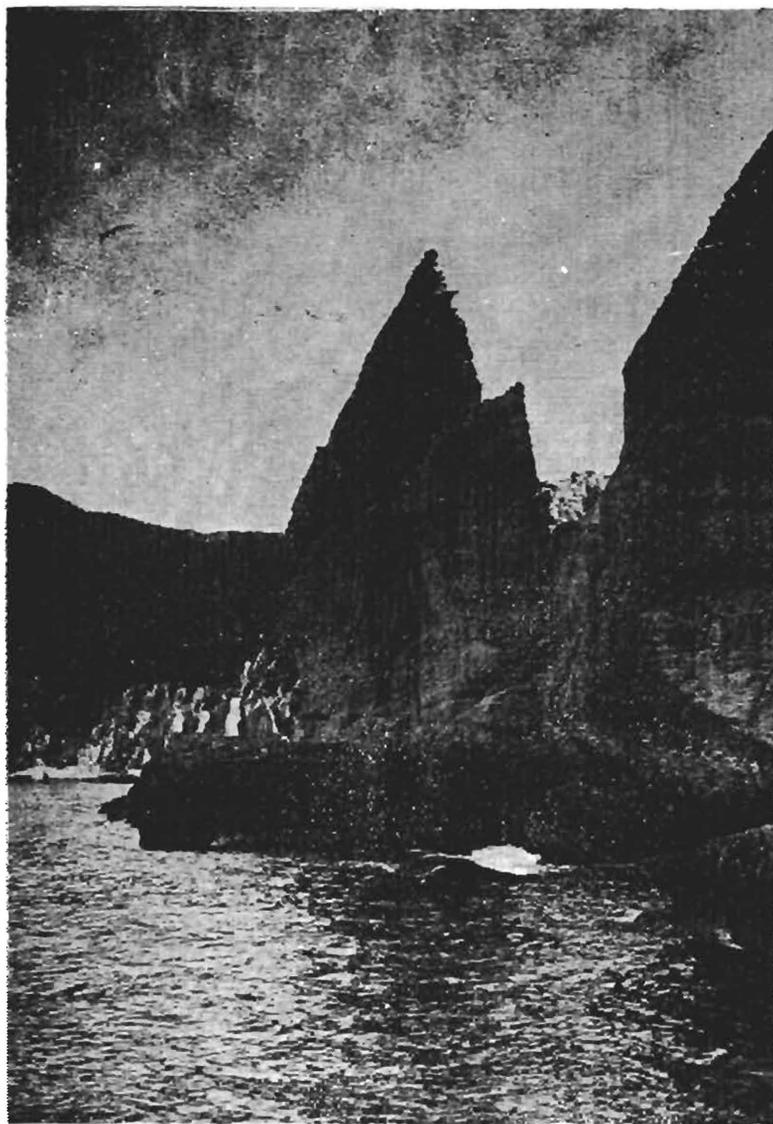
上記の様に佛ヶ浦は奇岩怪石の集合によつて出来た沿岸の景勝地で南端一ツ佛から北端五百羅漢で終點をつけてゐる、海上からの遠望はさながらグリーンランドの大氷山の寫眞を見た時の様な感じが致しますが、愈々同地に接近して奇岩の形狀配置等を親しく觀察すると、過去の世界に起つた地殻變動の狀況を遺憾なく發揮してゐることを認むることが出来ます。一方通俗的に觀察すると奇岩の形像は信仰上佛敎的の物類にもよく似てゐるので、これを綜合して考へると結局大町桂月翁の詠じた一句「飽れはて驚きはて

て佛浦、念物申す外なかりけり」と云ふことになるでせう。

## (二) 佛ヶ浦景勝の由來

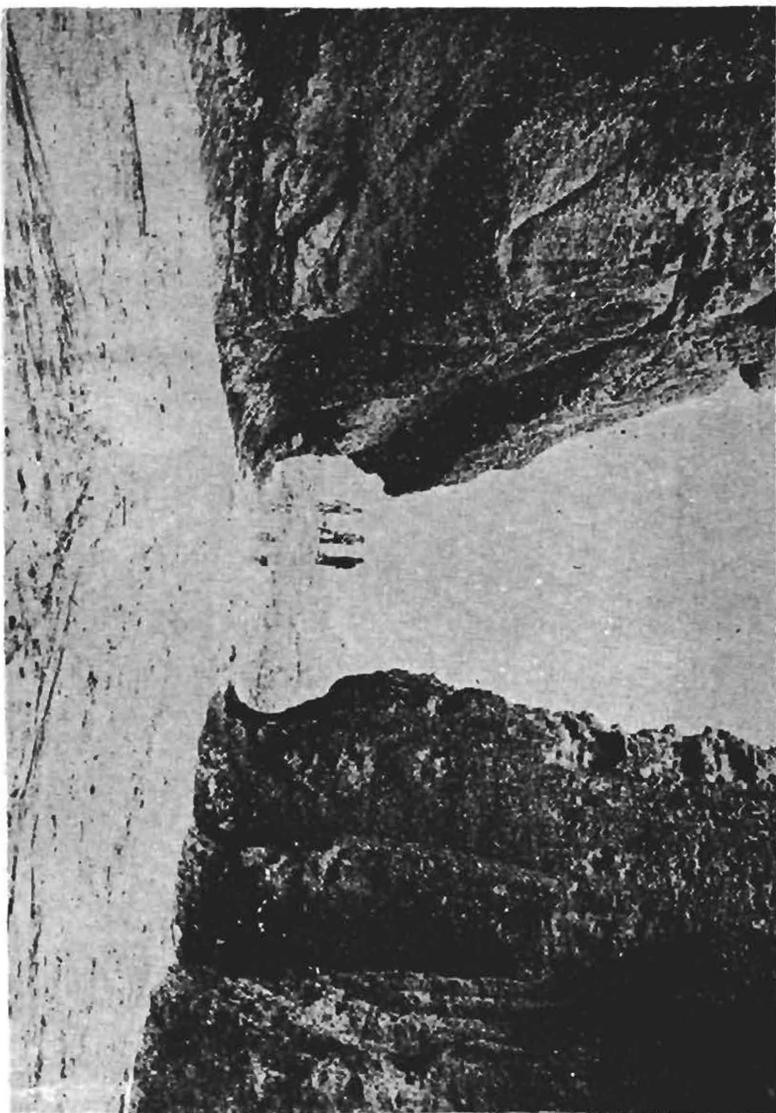
佛ヶ浦は恐山の寄生火山朝比奈岳の裾野に當てゐる段丘地で、地質學の教ふる所によると今から約一千万年前といはれてゐる第三紀の時代に起つた地殻大變動の結果、恐山は海底から噴火しながら隆起したのであるから、その火山灰火山砂は凝灰して今日の佛ヶ浦の凝灰岩が出来たのである。岩體が出来てから後は隆起の途中海水の侵蝕を受けて大体奇像の岩形となつたが、隆起後は永年月に亘つた風雨の侵蝕のため岩體組織中の軟かい部分は削磨されて、現狀の様な千態萬様に彫刻された岩が出来たものと謂はれてゐます。この證據は現に一つ佛の巨岩とその附近の岩體に存在してゐます、即ちこれ等の岩體に存する明かな横條線は過去の汀線痕であることを物語つてゐるのである。佛ヶ浦の岩石は何れも凝灰岩で岩石分類學上水成岩の中碎屑岩である。成因上岩漿の種類により流紋岩質凝灰岩(綠色凝灰岩)と稱するものである、この岩石は東北地方に特に發達してゐるもので凝灰質を帶び地肌は白、灰、淡綠色で多孔質脆弱吸水性に富み、風化を受け易い特性を持つてゐる、蓮華岩附近の岩體中には方解石の完全な結晶を含んでゐたのを認めました、或岩體の表面が褐色をしてるがこれは含まれ

圖 一 第



勝 景 浦 ヶ 佛

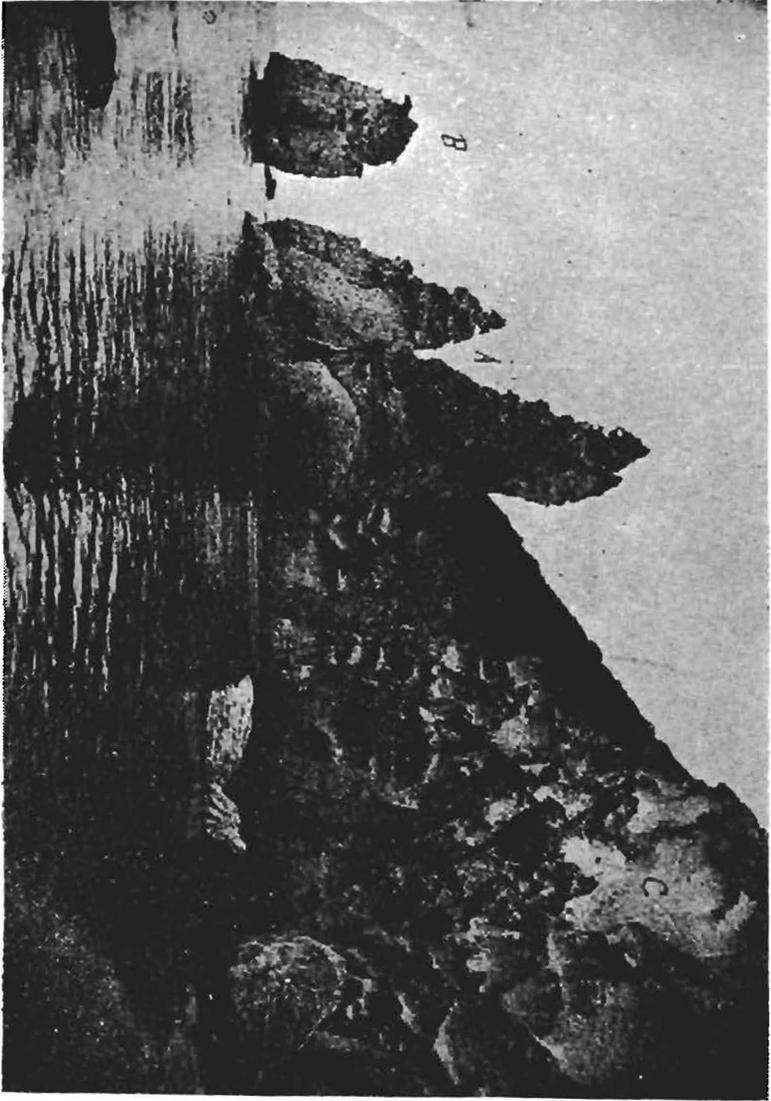
(日四廿月九年八和昭)む望を漢羅百五らか佛ツ一



勝 景 浦 ケ 佛

(日四廿月九年八和昭) 者筆は央中るて立に外戸門で砂白は面表地む望を濱海らか川廣大の瀟樂極

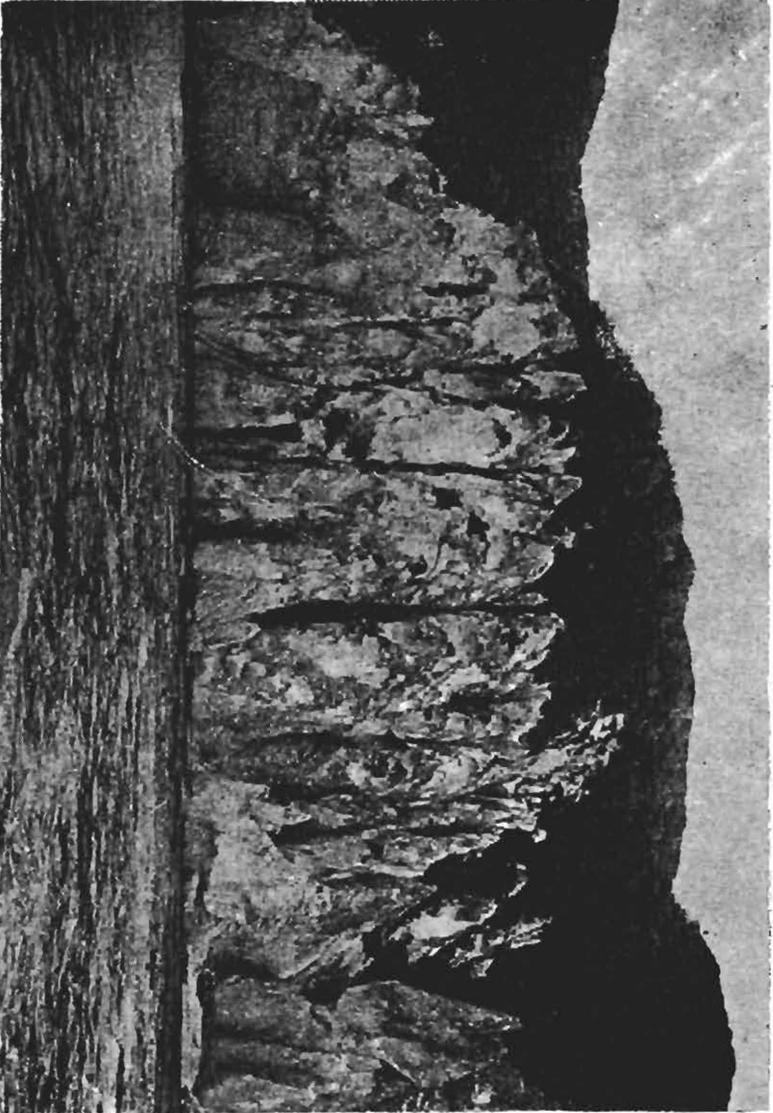
圖 三 第



(部 央 中) 勝 景 浦 々 佛

(日 四 廿 月 九 年 八 和 昭) 礁 岩 (D) 岩 來 如 (G) 門 雞 雙 (B) 岩 袋 布 (A)

圖 四 第 四

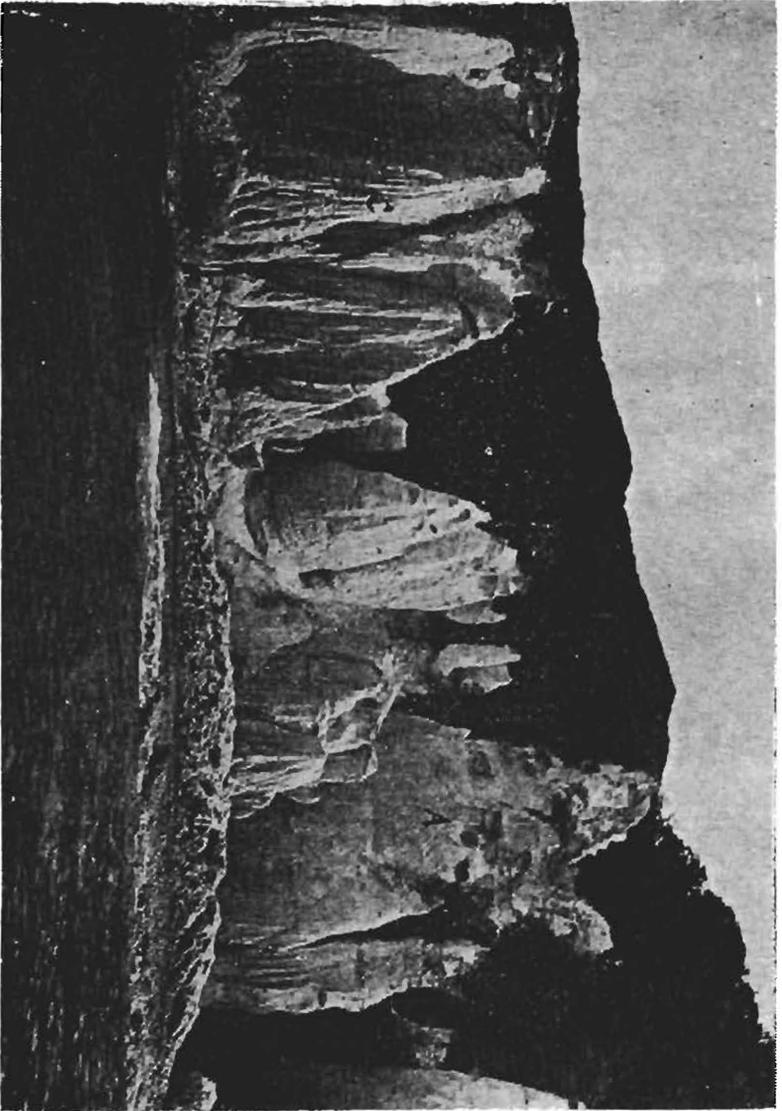


佛 兮 浦 全 勝 景

(日四廿月九年八和昭)

景 全 漢 羅 百 五

第五圖



(昭和八年九月廿四日)

佛ヶ浦景色  
A) 岩子親 (A) 岩子親  
B) 岩子 (B) 岩子  
C) 五百羅漢の第一 (C) 五百羅漢の第一

てゐる鐵分が酸化されてゐるがためである。尙現在の風光に影響を及ぼしてゐることは、隆起後に起つた山崩の作用で、その際に土流は現在の諸岩體に堰止められたが弱い岩體がくだかれて低い所に轉がされ、或は全く埋められてしまつたのである。五百羅漢や牛瀨附近の諸怪岩は背後に土流を抑へ止めたものであるから、皆背後は立派な森林をなしてゐるのである。蓮華岩や蓮華池の小奇岩は附近岩體の破片が浪に洗はれて出來たものである。十六羅漢は海岸から少し山の方に聳立してゐるが、比較的岩骨が硬かつた爲土流に倒されないうで上半身を現はしてゐるのである。又五百羅漢やその他の沿岸岩壁も同様の意味で背後に來た土流を止めたから現景を残してゐるのである。又將來とても山崩でもあつたなれば今の兀座してゐる奇岩は埋没或は挫折されて、現景が半減するに相違がありません。因に極樂濱の白砂は恐山湖畔極樂濱の白砂と成因が同じく、流紋岩質の分解した石英砂で彼の舞子濱の花崗岩が分解した石英砂とは母岩を異にしてゐる今迄述べたことを要約すると佛ヶ浦の諸奇岩は海底から隆起した途中海蝕を受け、隆起後も長年月の間風雨の侵蝕消磨作用を受けた結果現狀を呈する様になつたものである。而して岩の種類は流紋岩質凝灰岩といふもので、本縣西海岸大戸瀬の千疊敷（綠色角礫凝灰岩）上州妙義山（集塊岩）等の岩とは別種のものである。

#### 郷土の名勝佛ヶ浦觀察記

### (三) 佛ヶ浦の陸産植物相

佛ヶ浦境内には海濱植物が少からずあるが群落の目立つたものがない。又西海岸に特有なハマゴウとか本縣一般海岸に普通なハマナス、太平洋岸のコハマナス等が見えませぬ、むしろ大間半島沿岸の海濱植物相に似てゐると謂ひ得るのです。今日の調査したものはウツラン、スナビキサウ、ハマヒルガホ、オカヒジキ、ハマアカザ、ヒナノウシツボ、タウオホバコ、コハマギク、ハマゼリ、ハマホツス、エゾオグルマ、ハマニガナ、ハマフウロウ、シホマツバ等で、シホマツバは二見岩と五百羅漢との途中沿岸の石礫の間にあるが、他のものは悉く山岸の陰濕な所に生えてゐる爲に發育はよくない。二見岩の頂上にはハヒネズ（下北方言ハマバラ）とその他の矮灌木が生えてゐるので一入風致を添へてゐる又背側面の山岸の岩壁にはウド、ニハトコ、アザミ、アマニユ（方言アマネラ）、オロシヤギク（珍稀歸化植物）アキタブキ（方言フキ）、クズ、オホイタドリ（方言サントリ）、オミナヘシ、オトコヘシ、ススキ（カヤ）、タニウツギ（方言ガザ）、コバノフユイチゴ等の外に、有毒植物のドクウツギ（方言ウマオドロガシ）、トリカブト（方言ブシ）、ノブダウ（方言メクラブダウ）、等がある。地藏堂宇背後の山地にはシナノキ（方言マダ）、

ナラ、イタヤ、ヤマザクラ、モミヂ、オホイワアザミ、クズ、ヤマブドウ、ホドイモ等が認められるが、シナノキとナラは林相の大部分を占めて居る、林木は強い海風を受くるのと林地が肥沃でないために發育が悪い。又佛ヶ浦の中央部から牛瀧部落に至る間の崖上にはツ、ジ、シロバナシヤクナギ(方言シヤクナギ)、フヂ等も點々ある小井川潤次郎氏の採集談によると野生のオモトもあるそうだが今回には發見し兼ねました。

要するに佛ヶ浦の風致植物は背後森林をなしてゐる落葉樹で、松杉の様なもの一つもありません、海濱の植物中誇とすべきは歸化植物のオロシヤギク(菊科)が生育してあつたことで、露國が原産で樺太でも豊原附近にあるばかりで、北海道でもまだ發見されてゐないのがこの邊鄙な佛ヶ浦の砂濱に育てあつたことは意外の感に打たれました。

#### (四) 佛ヶ浦の陸産動物

佛ヶ浦境内及び附近には鳥獸類は相當に多い、牛瀧部落にはスズメ、ハシブトガラス、トビ、モズ、セグロセキレイ、キセキレイ、アラゲラ、コゲラ、アカゲラ(方言ケラツ、キ)、四十雀、五十雀、日雀、小雀、カケス、ヒヨドリ(方言チヨウマン)、ウグヒス、カツコウ、ホトトギス(方言メツゲトリ)、ツ、ドリ(方言介吹鳥)、クロツグミ(方言コツケ)、

アカハラ(方言チャツゴ、バクロドリ)、ツバメ等が見えてゐましたが、佛ヶ浦にはスズメとツバメを除いた上記の鳥が皆ゐるし、その他に海濱性のイソヒヨドリ(方言イソコツケ)、ウミウ(方言ウノドリ)、ウタウ(方言ツナギトリ、ハナドリ)、も點々と岩礁に止つてゐました、背後の林中にはメジロ、三光鳥(方言ウシポイ、ヲナガ)、トラツグミ(方言チコクドリ、カネコドリ、カネタ、キ)、ミソサバイ(方言ミソヌスポト、マメジヨ)、キビタキ、オホルリ(方言アラムマ)、クイイタギ(方言マツムスリ、マツトリ)、エナガ、ノビタキ、ウツ、マヒワ(方言ヒワコ)、イカル(方言三光鳥)、ヨタカ(方言カスガヒ、ナマスバタキ)、ヤマドリ等がゐて、春から初秋迄は色々の音楽が演奏されてゐる、海上には季節的に多數のケイマフリ(方言アカアシ)オホミヅナギドリ、ウミスズメ、ハシブトウミカラスや鴨類も出現する、獸類では日本猿、カモシカ(方言アラシ)、キツネ、タヌキ(別名ムヂナ)、エチゴウサギ、モモンガ、ムササビ(別名バンドリ)、ヤマネ(方言キノコダマ)、リス(方言キネズミ)、イタチ、クマ等は主なものだが、クマは極稀に現はれキツネもタヌキも近年は滅切不足になつてゐる、サルは大正十三年から捕獲禁止區域の制を布かれて保護をうけてゐます。爬虫類はマムシ(方言クソヘビ)、シマヘビ(方言サナダヘビ)、ヤマカガシ(方言ヤマガゼ)、アラ

ダイシヤウ(方言アヲノロシ)、カラスヘビ、チムグリ(方言アブラヘビ)、等であるがカナヘビもよく見當ります、マムシも別段人畜には害を及ぼしてゐません、兩棲類ではニホンアマガヘル(方言アヲビキ、アヲモツケ)、ヒキガヘル(方言ガマモツケ、ウスモツケ)、ヤマアカガヘル、ツチガヘル、ハコネサンセウウヲ(方言サンソカツカ)等は牛瀧附近に棲息してゐます。昆虫類、蜘蛛類に就ては調査が不十分で茲には書かれませんが、佛ヶ浦の岩礁の上にアラクサガメの一種が澤山止つてゐたのは不思議である、牛瀧部落が蚊(方言ヨガ)が多いので有名であるばかりでなく佛ヶ浦背後の山路には蛇が澤山群集し恰度蜜蜂の群飛してゐる様なものである。

## (五) 佛ヶ浦の交通

青森市を基點として佛ヶ浦の交通を考へると先づ不便な所だと云はねばならない、且附近の風波が強いから十月以後は四月頃迄上陸することが出来ません、佛ヶ浦の根據地は牛瀧部落であるから海陸兩コースがあるがとにかくこゝに行かなければならない。牛瀧に行くには海路によるのは好便で而も順路である、青森佐井間の定期汽船を利用するなれば約七時間で牛瀧に着きますこゝから小舟に乗つて沿岸傳に約三十分位北に進むと佛ヶ浦に到達します、上陸し

てこゝの景觀を極め夕方小舟で牛瀧に歸りこゝで一泊をする、翌日は前日佐井迄行つた歸り汽船にのつて青森に歸るのであるが、この船は恰度よく歸らない時がある、かくすると一日又待たなければならぬことになるので不便だといふのです、陸路をとられる方は汽車で大湊迄行き、こゝから自動車で川内迄行きこゝから營林署の森林鐵道に乗つて野平迄行き、こゝから約二時間位一里の山路を通つて牛瀧部落迄行き一泊し、翌日小舟で佛ヶ浦をゆつくり見物して一泊し、前日のコースをとるか青森行の汽船を待つて歸ることになります、先づ普通の場合では三日間の日子がかゝることになります、最近には各會社で觀覽船を出して日歸り見物が出来る様に便利を圖つてゐるから、この團體に加はつて見物するのは經濟的で有効であると思はれる。牛瀧部落は戸數約三十位の漁村で佐井小學校の分教場がある位だが、民習は至つて質朴で旅館と云ふべきものも飲食店の様なものも別れない、只熱心に遙々この地を探勝して來る御客様の便宜をはかつてやるといふ意味で、この部落の坂井家で宿泊の勞をとつてくれるに過ぎないのである、故に豪遊を極め様とする方はキヤラメルと煙草の外は肉類の様なものは一切用意して行かなければなりません、魚介類では天候が悪くなければアワビでも外の魚類でも大抵食膳には間に合せることが出来るが、天候が變ると全く鮮魚

も何も求めることが出来ない様になつてゐます。この状態であるから天候的名勝地であると謂はねばならぬことになつてゐます。

### (六) 結 び

佛ヶ浦は下北半島西部の隆起海岸にある緑色凝灰岩が、今から約一千万年といふ長い年月の間朝な夕なに受けた風化彫刻の作用と、時々起つた天變地異の作用によつて、現在の様な奇岩怪石が適所に配置されて自然の銘庭園が成立したのである。この造化の神がこしらへたみちのくの岩石中心自然庭園が、交通不便であるがために全く隠れて居たのであるが、近頃からやつと世現に知られる様になつたので、行つて見ると見る程岩景の配置が四周の背景と調和されてゐる塩梅がよく出来てゐることが判る、されば山水文學乃至自然科学上の諸資料が少からず獲られることゝ信じてゐます、佛ヶ浦は近い内に天然紀念物に指定されることになつてゐますが、苟も我郷土を愛する方々は是非一度はこの地を踏査して頂き度いのであります。

(昭和九年七月廿七日稿)